観光社会学の可能性

── J. アーリーの「まなざし」論を超えて ──

土　井　文　博

1. はじめに

「観光社会学」という言葉は聞きなれないかもしれない。文字通り，観光を社会学するという意味だが，観光をどう社会学的に分析するのか，そもそも，観光を分析することに何の意味があるのかといった疑問も持たれよう。安村克己は自ら手がけたその入門書の中で「マス・ツーリズムが世界中に影響力を及ぼす社会現象となったにもかかわらず，社会学は観光に着目していない」[1] と記し，「観光社会学とは，社会幻想としての観光の本質を探究し，その成果を手がかりに社会の本質をも考察する社会学の一分野である」[2] と定義しているが，私の中でも観光社会学は単に観光という社会現象を捉えるだけでなく，そこから見えてくる人間の特性によって，社会の本質，あるいは人間の特性を探究するのに打って付けの分野であると考えている。そこで，本稿では観光社会学が有する可能性を論述していきたい。

2. 観光の歴史

観光という現象は 19 世紀半ばから始まるが，旅行そのものの歴史的な変遷は，観光社会学の古典と称されている D. ブーアスティンの代表的著作である『幻影の時代』の中で的確にまとめられているので，それを紹介することから始めよう[3]。17，18 世紀のヨーロッパにおいて，外国への旅行は教養を身につけるための道具として用いられ，若い貴族が成長するために出かけるものであった。準備のための時間や旅行費用がかかるだけでなく，旅先でも，強盗，人殺し，病気などの危険のほか，道そのものも未整備で，また，宿泊施設も少なく，アブラムシやノミなど不衛生で，旅行者は数的にも少なかったと記している。これが，19 世紀半ば過ぎから，外国旅行の性格

1）安村ほか 2011: p7
2）同書 p8
3）Boorstin 1962＝1964 第3章「旅行者から観光客へ ── 失われた旅行術」

が変わり始める。その変化は英語の中に新しい言葉として「観光客 tourist」というものが登場し，その意味を，当時の辞書は「楽しむために旅行する人」と定義していたという。彼はこれを「旅行者の没落，観光客の台頭」[4] と嘆いているが，鉄道や汽船といった交通機関が進歩したことも，こうした変化の要因として挙げている。このように外国旅行は一部の上流階級の人々のものから，中流階級の人々が利用可能なものとなったが，その変化に伴って，「ガイドつき旅行」が発生する。旅行という冒険が危険を伴うことなく味わえる商品として登場し，鉄道網が早くから発達していたイギリスでは，鉄道を使った団体旅行が組織されるようになった。その立役者としてトマス・クックが紹介されているが，彼は，スコットランドやアイルランドへの旅行はもちろん，ヨーロッパ一周旅行やアメリカ旅行，そしてエルサレム巡礼旅行までも企画した。また彼は，旅行ガイド，ホテルのクーポン，部屋の予約制度，旅の心得など，そのために必要なサービスを発展させている。彼によって設立されたクック旅行社は今なお健在で，トラベラーズチェックを開発したライバルのアメリカン・エクスプレス社と共に，旅行の大衆化を促したものとして紹介している。

3. 観光社会学

つぎに，観光社会学と称される分野での議論を概観しよう。ブーアスティンの主張はこうである。こうした旅行の商品化は，旅に付随するそれまでの煩わしさから旅行者を開放し，旅行を簡単に安心してできるものへと変貌させたが，その代償として，行く先々での住人との出会い，目的地にたどり着くまで目にする景色などを奪うことになってしまった。旅行が商品化されることへの彼の危機感は，「土地の人を『見物する』という行為自体が，旅行者を土地の人々から隔離している。土地の人は隔離所に入れ，観光客はエア・コンディショニング付きの快適な部屋の窓から彼らを眺める」[5] という表現によく表れている。また更に，「今日では，観光客は外国そのものを見るのではなくて，そこにある観光客用に作られたモノの方を見ているに過ぎない。・・・普通に見られるものは，とくに観光客のために収集して，ミイラにしたもの，観光客のために特別に上演される催物など，完全に人工的なものなのである」[6] と言うように，眺める対象そのものが本物でなくなっていると指摘している。こうして，旅行体験さえも観光客用に創作され，観光客側もそうした作りものを見て満足するようになる。旅行が商品として売り出される限り，宣伝文句でうたっている体験を保証し

---

4) 同書 p96
5) 同書 p111
6) 同書 pp113-4

なければならないが，ここに観光客用のアトラクションが必要な理由がある。なぜなら，本物の儀式や祭りは，その時限りのもので，観光客用に上演されるわけでもないため，自然や本物任せでは，その保証が得られないからである。彼の本のタイトルにある「幻影」とは，観光客の期待に応えるために作り出された人工物のことで，観光客側もそうした「幻影」に満足を覚えるのであって，決して「正真正銘の外国文化」を見たり楽しんだりしたいわけではない。「日本でのアメリカ人観光客は，日本のものよりは，日本風のものを捜し求める」[7] (傍点は著者) という表現にあるように，観光客も自ら進んでだまされようとするのだという。

こうしたブーアスティンの主張を受けて，つぎに展開されたのが，真正性 (authenticity) を問う D.マッキャーネルの議論である。(マキャーネル，マッカネル，マキャネルなど日本語では様々な表記がされているが，ここでは本来の発音に近いと思われる「マッキャーネル」で統一した。ただし，引用する場合には，その著者の表記に従うことにする。) 真正性とは，ブーアスティンの掲げる疑似イベント，すなわち観光客用のアトラクションと対峙するもので，「本物」を指すことになるが，外国旅行で言えば，実際の現地の人々やその生活そのものを意味する。彼は，観光客が自分たち用に作られた偽物に満足しているというブーアスティンの主張に反論し，現代の観光客も本来の文化や姿といった，本物を探し求めていると主張する。そこで登場するのが，E. ゴッフマンによって用いられた「表舞台」「裏舞台」という言葉である。ゴッフマンの定義を用いて，表舞台を「ホストとゲストが，あるいは顧客とサービス提供者が出会う場所」，裏舞台を「内輪のメンバーが出番までリラックスしたり準備をしたりする場所」としているが[8]，観光客は「表舞台」を見るだけで満足などしておらず，常に「裏舞台」を覗こうとすると主張し，「『観光客』という言葉は，真正ではない経験ばかりしている人たちに対する嘲笑的なラベルとして次第に用いられる」[9] として，ブーアスティンの考えを非難する。ただし，この表舞台と裏舞台という区分はそう簡単ではない。裏舞台と考えられていたものが，ゲストに見られることを意識して準備されていれば，そこは裏舞台を装った表舞台の一種となり，演出された舞台裏，演出された真正性となろう。このように，見せる，あるいは見られることを意識して作られた裏舞台はどんどん表舞台化していくことになる。彼はこのことを，「観光的意識は，真正な経験を求める願望によって喚起され，観光客は自らがそうした方向性で動いていると信じているようだが，その経験が実際に真正かどうかは，たいてい分からないのが確実なところである。常に起こりうるのは，裏舞台の入り口に

7）同書 p117
8）MacCannell 1999＝2012: p111
9）同書 p113

連れて行かれたのが，実は観光客の訪問用に予め設定された表舞台の入り口である，ということだ」[10] として注意を促している。また，彼は観光の状況設定を，表舞台から始まり裏舞台に終わる連続体として捉え，6段階に区分して見せたが[11]，表裏という区分自体，誰を意識した空間であるかということで変わってくる相対的な概念であるため，彼が考えるほど明確に区分できたとは思えない。また，物理的に区域で区切ってもあまり意味がない。表裏というのは社会的な構成物で，意識による状況の定義づけに過ぎないからである。したがって，物理的にはまったく同じ空間でも，時間によって，あるいは構成メンバーや会話の内容によって状況が変われば，表と裏は容易に逆転するのである。彼はまた，現代社会において真正性を追い求めようとする人々の欲求は社会的に作られたものとして，次のように表現している。「これらの関心は，社会全体のレベルでの連帯を保持する。つまりその連帯とは，現実性と真実が社会のどこかに存在し，我々がその現実性と真実を探索し洗練しようとせねばならない，という集合的合意である。」[12] こうして見てくると，「本物」を体験しようとするか，「舞台裏」を見ようとするかといった違いはあるものの，真正を追い求めるとする前提にマッキャーネルも立っているという点では，ブーアスティンと変わらないと言えるだろう。

そこで，つぎに登場するのが，ボードリヤールの「シミュレーション」という概念に基づく考えである。「シミュレーション」とは，偽物である「シミュラークル」が組み合わさって展開される世界を意味し，「期限も現実性もない実在のモデルで形作られたもの，つまりハイパーリアルだ」[13] と彼は表現する。「シミュラークル」はコピー，表象，記号，イメージなどとも表現されるが，「コピーのコピー」という表現があるように，増殖していくことが可能で，シミュラークルそのもので世界を広げていくことも可能となる。こうした傾向の中，ボードリヤールは，本物の基準点はあるのか，という問題提起をしていると言えるだろう。彼は，ディズニーランドを引き合いに出し，「ディズニーランドの幻想は真でも偽でもない。それは実在のフィクションをリバースショットで再生しようと演出をもくろむ抑止の仕掛けだ」[14] と述べているが，「実在のフィクション」というのは，ディズニーが作り上げた映画の世界がベースと

10）同書 p121

11）彼の言う6段階の説明を著書 (MacCannell 1999＝2012: pp122-3) から抜き出しておこう。第1段階：ゴフマンの言う表舞台。第2段階：表舞台に見えるように，いくつかの特徴的な部分につい：て装飾された観光的表舞台。第3段階：舞台裏に見えるように全体的にしつらえられた表舞台。第4段階：部外者に開放される舞台裏。第5段階：観光客がときにちょっと覗いてもよいように整頓され，少し改良された舞台裏。第6段階：ゴフマンが言う舞台裏。

12）MacCannell 1999＝2012: p185

13）Baudrillard 1981＝1984: pp1-2

14）同書 p18

なっているという意味で，ディズニーランドはそれを3次元で再現する試みであるからだ。ディズニーランドに限らず，今や本物という基準点さえ存在しない場所が観光地として数多く存在する。この考えに基づくと，本物という基準点がなくなり，どれが本物でどれが偽物かという議論は意味をなさなくなる。さらに，こうしたシミュラークルの世界では，「観光客はファンタジーの世界を“あえて『本物』と見なしている”のであって，『本物／偽物』という区別に何の興味も持ってはいない」[15]（下線は筆者）のである。この問題に関し，遠藤英樹はフロリダ州オーランドにあるギブ・キッズ・ワールドの例を取り上げているが[16]，いつ死ぬかも分からない状態にある難病の子ども達に夢や生きる希望を与えるというその影響の大きさを考えれば，それが幻想の世界であるかどうかなど，親にとってはどうでもいいことであろう。幻想でも有益な例の一つとして考えることができるが，幻想かどうかを問うこと自体，ブーアスティンが幻影を追う観光客を馬鹿にしたのと同様の知的バイアスと捉えることもできよう。ここでは，どういう効果があるかが重要となる。

観光の対象に現実と幻想の区別が無いとなれば，何を持ってその対象とすればよいのか。そこで注目したいのが，J.アーリーの「観光のまなざし」論である。(マッキャーネルの場合と同様，アーリーも，日本語では「アーリ」という表記が多く見られるが，ここでは本来の発音に近い「アーリー」で統一した。ただし，引用の場合は，その著者の表記に従うことにする。) アーリーは，病気という診断が医師に委ねられるM.フーコーの「医学的まなざし」という考えを援用し，人々がまなざしを向ける観光対象がどのようにして作られていくかに注目する。「観光のまなざし」は相対的で，流動的であるが，常に差異を持って形成されるとし，次のように述べている。

> 「これが観光のまなざしだというようなものがあるわけではない。社会によっても社会集団によっても時代によっても多様なものである。こういうまなざしは差異から形成されていく。ただ，このことから，すべての時代のあらゆるツーリストに真実であるような普遍的な経験は存在しないということをたんに言いたいのではない。むしろどんな時代のまなざしもその反対概念との関係性から，つまり社会体験とか社会意識の非観光的形態との関係性から構成されていくのだということである。観光のまなざし一つ一つは何と対照しているかによって決まる。非観光体験の形態がどんな形をしているかの偶然で決まる。したがってまなざしは社会的行為や社会的記号のシステムを前提にするわけである」[17]（下線は筆者）。

15）安村ほか 2011: p65
16）遠藤・堀野 2010: pp33-35
17）Urry 1990＝1995: pp2-3

4.「観光のまなざし」論の展開

アーリーは「観光のまなざし」の変遷を，イギリスの海浜リゾートの盛衰を事例に捉えているが，その前に，大衆観光 (マス・ツーリズム) が広まる以前の状況についても触れているので，それを概観することから入ろう。ブーアスティンも述べていたように，近代以前の社会では旅行は特権階級に限られていた。しかし，それまでも組織化された旅行がなかったわけではなく，13，14 世紀には聖地への巡礼が大いに流行した点にも触れている[18)]。ブーアスティンが述べる貴族や紳士階級の子弟が行ったいわゆる「グランドツアー」はその後の現象で，17 世紀終わりに確立し，18 世紀後半には中産階級の子弟にも広まった。旅行に関する書物も話題展開や学術に力点を置いていたものから「百聞は一見にしかず式」にシフトしていき，「旅行体験の視覚化」，すなわち「『まなざし』の発展」が生じたとしている。また，ガイドブックの存在によって，旅行先で何を見るべきかといった「見方」が奨励され，ツアー自体の性格を変えて行った。そして，そのグランドツアーも自然観察や博物館巡りなどからなる「古典的グランドツアー」から，19 世紀には「ロマン主義的グランドツアー」，すなわち，「風景観光」などに見られるような「個人的で感動的な体験」を求めるものへと変わって行ったという。このロマン主義は，海岸線の鑑賞という形で海辺へのまなざしを促すことになったと考えた[19)]。

4－1. イギリスの海浜リゾートの隆盛

彼がイギリスの海浜リゾートに注目するのは，大衆観光というもの自体がイギリスの労働者階級から始まり，その彼らが目指した場所が海浜リゾートだったからである。ブーアスティンも述べているように，旅行の大衆への普及には交通機関の発達が大きく寄与している。特にアーリーが注目するのが鉄道網の整備で，19 世紀後半には，鉄道による団体旅行が広く行われるようになったと述べている。旅行に行ける者・行けない者という区分が減少するにつれ，旅行先としてどこに行くかという「場所」が重要性を増すようになり，場所の選定にあたって，「まなざし」が作用することとなる。

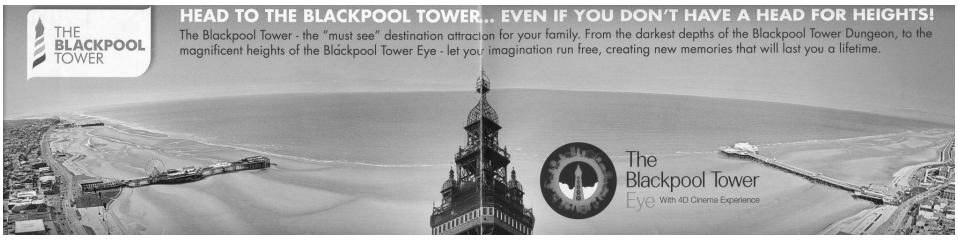
海辺がその対象として注目されるようになった理由に，彼はまず医療業界を挙げている。英国初の温泉町はスカーバラ (Scarborough：イングランド北東部のノース・ヨークシャー州にある町) で，そこは海辺にあったことから，他の温泉町よりも有名となる。それは，ある医者が海水を飲んだり水浴びしたりすることの効能を提唱したこと

---

18) 同書 pp7-8
19) 同書 p36

で海水浴をする人が増え，これを元気回復剤のように人々が信仰し始めたからだと記している。そのため，当時の海水浴は成人向けで，冬にも行われており，「浸礼」という意味があったという。このように，海辺は娯楽としてではなく，医療の場として存在した。もう一つ，海辺が注目されるようになった理由として，それが有する広大な空間を挙げている。温泉地の収容能力には限りがあるが，海辺はそれと比べようもないほどの収容能力があるからだ。筆者は 2013 年の夏にイングランド北部を訪れる機会を得たが，下の写真は，その時集めた資料の 1 つで，イングランド北部の海浜リゾート地として当時非常に有名だった (今でもなおある程度有名であるが) ブラックプール(Blackpool)に今も健在するブラックプール・タワーのリーフレットに載っていたものである。そこからも，このリゾート地の海岸線の広大さがよく分かるだろう[20]。

まなざしの問題そのものと離れ，アーリーは社会状況の変化について言及する。工業従事者への福祉が進み，所得も増大するにつれ，人々は旅行に費やすだけの経済的余裕が持てるようになる。それと同時に都市化も進み，過密化によって公園や広場といった公共スペースが暮らしの場にはほとんどなかったことが挙げられている。また，労働者階級に自律的な共同体が発生したこと (これについては後述する) や，飲酒・怠惰・血なまぐさいスポーツなどへの反対運動，粗野な労働者階級をレクレーションで啓蒙するといった考えなども影響したと考えられ，労働条件に関しては，合理化による労働時間の削減，土曜日の半ドン制の導入，一週間単位の休暇の達成が挙げられている。特に「一週間単位」という長い休暇は，ランカシャー綿織物工業地帯で起こったという。また，有給休暇運動も取り上げており，1920 年代半ばには 2 割弱の労働者が有給休暇を得ていたようだが，1938 年の有給休暇法の制定によって，「休暇というものがほとんど市民としての証となり，権利となったのである」[21] と記している。



The Blackpool Tower のリーフレットの一部
（3 つある桟橋は右から North Pier，Central Pier，South Pier）

20）ブラックプールのタワーからの眺めは，ブラックプール・タワーの HP 内にある「360 度のパノラマ (360 °PANORAMA TAKE IN THE VIEW)」でも見ることができ，ビーチはもちろん，ブラックプールの市街地の様子もよくわかる。
(http://www.theblackpooltower.com/our-attractions/the-blackpool-tower-eye.aspx)

21）Urry 1990＝1995: pp47-8

イングランド北部の海浜リゾート地として，ブラックプールの他に，モアカム (Morecambe)，サウスポート (Southport)，セント・アンズ (Saint Annes) などが挙げられるが，それらは一様に発展したのではなく，「社会的色調」の違いが見られたという。アーリーはサウスポートとブラックプールを取り上げているが，優雅な大通りを有し，商業主義的な発展を排除した隠居用別荘のリゾートとなったサウスポートに対し，ブラックプールは小地主の共同体として始まったことから，「小さな物件の，計画性の欠如した集落と成り果て，民宿，娯楽街，小店舗などばかり」[22] となり，中産階級を惹きつけなくなったと説明している。この社会的色調を「リゾート位階」とも称しているが，マーケットが特定の工業地帯と結びつくことによって，リゾートに序列ができ，裕福な行楽客が行く所，労働者階級が行く所と，自らのステータスと結びついて消費されるようになった。

（先ほどのリーフレットの写真以外，本稿で紹介する写真はすべて筆者が撮影したものである。時代は異なるが，当時の面影を見ることができる。）

Blackpool North 駅から浜辺へと向かうストリート

ブラックプール・タワー

サウスポートの広場と大通りの様子

22）同書 p41

列車による団体旅行は，1841 年創立のトーマス・クック社が禁酒集会のためにレスターからラフバラまで一列車をチャーターしたことから始まったと記しているが[23]，1844 年に初めて募集した行楽用の旅行では，すでに「『まなざしを向ける』べき推薦店と歴史的興味のある場所への案内が含まれていた」[24] という。また，先に触れたように，こうした列車を使った団体旅行が北イングランドで起こった理由として，労働者階級による「自主的組織」の存在にも着目している。この自主的組織は，貯蓄や家を空ける際の治安など様々な便宜もはかったようで，また，綿織物産業における女性労働者の比率の高さも，余暇が家族や主婦中心となる傾向を作ったとも記している[25]。

19 世紀中葉までイングランドの大きなリゾート地は，ほとんどがイングランド南部にあったが，ランカシャーの織物工業地帯の発展に伴って，イングランド北部でリゾート地が目覚しい発展をし，1911 年にはブラックプールがイギリスで 5 番目に大きなリゾート地となる。当時の様子とは異なるであろうが，先に挙げたモアカム，サウスポート，セント・アンズにリザム (Lytham) も加え，2013 年夏に訪れた際に収めてきたそれらの町の海辺の写真を紹介しよう[26]。

モアカム

サウスポート

23) 同書 p43　レスター (Leicester) はイングランドのほぼ中央に位置するレスターシャー (Leicestershire) 州の真ん中にある都市で，ラフバラ (Loughborough) はそこからほぼ北に位置する。直線距離にして 15 km ほど。Google Map で検索すると，現在は 4 駅で約 20 分，特急だと 1 駅で 11 分と出てくる。

24) 同書 p43

25) 同書 pp44-5

26) 町の様子は今やインターネットで写真を探すことができ，また Google マップやストリートビューでも見ることができるので，その他の様々な場所や角度からの眺めは，そちらで確認して頂きたい。
また，観光客で賑わっていた当時の海辺の様子は，今日と比べ，桟橋，ビーチ，人々が海水浴をする光景など全てを含め，やはりだいぶ異なる。その様子は昔のランカシャーを収めた写真集 (*Lancashire-A Second Selection: Photographic Memories* と *Lancashire: Living Memories*) に見ることができる。いずれも著者は Dennis & Jan Kelsall。

セント・アンズ

リザム

アーリーが「自主的組織」の所でも触れたように，イングランド北部のリゾート地は，労働者によるコミュニティとの結びつきが強く，その成長のためには欠かせないものだったが，ブラックプールは地元ランカシャー州のほとんどの労働者をひきつけるほどであったのに対し，モアカムはイギリス北東部のヨークシャー州と結び付くなど，つながりが異なるというのも当時の面白い特徴である[27)]。

これまでのことをまとめると，海辺がリゾートとしてのまなざしを獲得していくにあたっては，旅行に関する書物による「旅行体験の視覚化」，自然を鑑賞の対象とするロマン主義，医療業界による海水の奨励，海辺という広大な空間，経済的余裕，都市の過密化，労働時間の削減・長期休暇・有給休暇などの労働条件の改善，労働者の自律的共同体の発生といった様々な要因によって社会状況が作られ，それらが労働者を組織的かつ大量に海辺へと向かわせることになったということだろう。

4－2　イギリスの海浜リゾートの衰退

イギリスの海浜リゾートは1970年代から急速に衰退していくが，アーリーはその原因を「リゾートから人が離れていく観光のまなざしの一連の構造変化」と捉え，「日常的であるものにおける変化」とそこから反射的に照らし出される「何が非日常だと見なされているのか」という問題について述べている[28)]。そこで彼が最初に取り上げるのが，「展望塔」と「桟橋」である。これら2つがもたらす非日常性を次のように表現している。

> 「こういう展望塔と，やや規模は小さいが桟橋は，物をその構造物から見ることを可能にし，人間の肉体を非日常的な自然現象へと結びつけることを可能にし，自然を凌駕する人間の力と一体化し，人間の力を祝福することを可能にしてくれる」[29)]。

27）同書 p51
28）同書 p60
29）同書 p60

中央桟橋からの眺め
（手前に写る花の類は，故人が好きな場所だったというポジティブな意味での献花）

非日常的な視点を与えてくれる展望塔や桟橋は，当時は非常に珍しく特別なものであったが，そうした視点自体がしだいに珍しいものではなくなっていく。当時，相当な驚きをもって眺められたであろうこれらの光景も，高い建物や塔を見慣れた私たちにとっては，それら自体，それほど特別なものには感じられないのではないだろうか。

つぎにアーリーは，遊園地あるいはレジャーランドを取り上げる。ブラックプールには，1960 年度開演のブラックプール・プレジャー・ビーチ (Blackpool Pleasure Beach) が今も健在で，カジノが隣接していた。また，路面電車の路線をはさんで，現在 Pleasure Beach にはウォーター・パークも存在する。

しかし，ブラックプールほど大きな遊園地ならまだしも，普通の海辺リゾートにある小さな遊園地の類は，新しい遊園地の登場によってその魅力を失っていく。その代表として取り上げられているのが，同じイングランド北部にある，オールトン・タワーズ・アミューズメント・パークである[30]。マンチェスター (Manchester) から南に 50 km ほど行った，バーミンガム (Birmingham) とのほぼ中間に位置し，今も健在するこの施設は海辺とは程遠い内陸部にある。遊園地が海辺にある必然性はなくなったのである[31]。以下はモアカムとサウスポートの海岸近くで目にした遊園地だが，サウスポートはまだしも，モアカムの遊園地は規模も小さく，訪れた時は休止状態であった。ブラックプールには，プレジャー・ビーチ以外にも，規模の小さな遊園地程度であれば，桟橋にも備わっており，子ども連れで賑わっていた。

30）現在の名称は Alton Towers Theme Park。Alton は邦訳書では「オートン」，Google Map では「オールトン」もしくは「アルトン」として表記されているが，ここでは「オールトン」とした。

31）そのホームページには，パークの歴史を紹介するページに「The Birth of the Modern Park」と題し，1980 年代初頭から最新のローラーコースターなどが導入されたことを記している。（http://www.altontowersheritage.com/heritage/article.asp?articleid＝32）

ブラックプールタワーと North Pier（北桟橋）

Central Pier（中央桟橋）

カジノとプレジャー・ビーチ

ウォーター・パーク

写真はいずれも中央桟橋（Central Pier）にある遊具の様子

アーリーはもう一つ，休暇キャンプ場の変化も挙げている。1980年代までに，休暇キャンプ場は時代遅れのものと捉えられるようになるが，オールトンから北東に約50km，ノッティンガム州シャーウッドという同じ内陸部にできたSherwood Forest Center Parcsの登場は象徴的で，人工海浜を有することで，余暇施設が海辺にある必要はなくなった[32]。

32）このCenter Parcsはイギリスに始まるが，今やヨーロッパ中に広がっている。
（http://www.centerparcs.com/）

以上のような形で海辺のリゾート地が有していた魅力が低下すると，海辺へ出かけることも減っていく。また，都市自体の脱工業化が進んでくると，工場のない海辺のリゾート地も，さほど特別のものではなくなってくる。そして，娯楽施設などのサービスの集約という点でも，ある程度の規模の都市と比べて，優れたものではなくなったとアーリーはいう。つまり，観光客の日常が変化し，海浜リゾートに対する非日常性が相対的に低下していったのである。また，テレビの登場も影響し，リゾート地で行われていた有名タレントのショーもテレビで見られるようになると，わざわざリゾート地に行って見る必要性もなくなっていったと指摘する。ブラックプールでは現在もショーなどの催し物はいろいろ行われているが，それらの魅力は昔よりもさらに低下していることだろう。

イギリスの海浜リゾートの衰退には，大衆観光の国際化も関係しているが，これも，特別な場所という位置づけを失って行った要因の一つであろう。イギリスにおける海浜リゾートブームの終焉を，アーリーは以下のようにまとめている。

「多くのリゾート地は，もはや〈非日常〉ではなくなったことを見た。かつての際立った様相も，ありふれた場になってしまったのである。砂とか海のようなものはたいていの場所で見られるようになった。とくに海外では。また，宿泊施設のようなものは英国内で，都市でも手に入るようになった。また，レジャー施設のようなものはほとんどどこにでも発達してしまった。大変多くの場所が，多種の専門サービス設備をつくり出し，これが現存のリゾートと対抗していった。ほとんどどこも『見世物と展示』のセンターになっている。そしてその結果，現在のリゾートは，他の場所と，それほど区別のつかない所となってしまっている。」[33)]

海辺が非日常性を失っていくにしたがって，かつての賑わいも無くなっていったのである。

North Pier のたもとにあるお店での生演奏

Central Pier 付近にある劇場のショーの看板

33）Urry 1990＝1995: p167

5. アーリーの「まなざし」論の限界を超えるために

5－1　アーリーの「まなざし」論の特徴と限界

これまで，彼のまなざし論の展開を紹介してきたが，彼の理論の展開の仕方には一つの特徴があることに気づく。それは，まなざしの構築に関わる社会状況や制度の考察に終始し，まなざしを向けるという実際の行為の分析には至っていない点である。安村は，アーリーのまなざし論の特徴を以下のようにまとめている。

「アーリは，観光の本質の解明に正面からとりくもうとはしない。多くの社会文化的要素がからみつく観光は多面的特性を有する複雑な社会現象であり，それゆえに観光行動の“特殊”理論を構築するのは不可能である，とアーリは考える。・・・観光を“まなざし”と捉える着眼点によって，アーリは，観光が発生し変遷する時代背景と社会文化の現実を分析し，観光の概念や理論を追究しようとする。観光まなざし論が考察しようとするのは，『観光のまなざしの発展と歴史的変遷』である。観光のまなざしは『社会的に構成され組織化される』ので，観光という個人の視覚には，それを取り巻く社会構造や時代背景が投影される。実際，アーリによる観光のまなざしの考察は，社会現象としての観光の広汎な社会学的領域に及ぶ。たとえば，それらの領域とは，まなざしの変容にともなう海辺リゾートの盛衰，観光産業の特徴や観光産業にかかわる政治経済の動向，ポストモダンを時代背景とする文化や社会の変容と観光，さらにグローバリゼーションと観光のまなざしの多様性などである」[34]（下線は筆者）。

ここからもうかがえるのは，アーリーの分析手法は，個人のまなざしという行為そのものをとらえるのではなく，そうした「まなざし」には社会構造や時代背景が「投影される」という前提で話が進み，間接的な要因の考察に終始するという点である。

続いて，安村は彼のまなざし論の問題点を以下のように指摘している。

「アーリがフーコーにならって付与する“まなざし”の特徴は，『社会的に構成され体系化された』まなざしというものだけである。・・・いうまでもなく，フーコーの業績の軌跡には，卓越した洞察と思索の背景があり，それらから導出されるまなざしの構造をふまえないかぎり，フーコーのまなざし概念は論じられない。あるいは，フーコーのまなざし概念を再構築する知的戦略を提唱する必要がある。しかし，こうしたまなざし概念の構造について，アーリはほとんど議論することなく，観光の歴史と現実を考察する。そのために，観光まなざし論は断片的・つぎはぎ的になり，まなざし概念はあいまいとなる」[35]（下線は筆者）。

34）遠藤・堀野 2004: p10-1

35）同書 p12

「観光のまなざしの概念は，観光専門家の知のまなざしに限定しなければ，医学的知のまなざしと同次元には取り扱えない」[36]

アーリーのまなざしの説明が，社会構造や時代背景という間接的な説明に終始しているとする点では，私も彼と同意見である。しかし，観光のまなざしを「観光専門家」に限定する考えには賛同できない。ガイドブックを始め，観光専門家によってまなざしが作られている側面もあるが，それはまなざしの形成要因の一つに過ぎず，まなざしそのものはその当事者である観光客のものと考えるべきであろう[37]。また，形成要因がいかなるものであろうと，それが実際に観光客のまなざしを作るという保証はない。この視点や説明過程がアーリーにも抜け落ちているのである。フーコーの医学的まなざしのように知の深い考察へと向かうのか，実際のまなざしの考察へと向かうのかは研究の方向性の違いということになるが，少なくとも，観光のまなざし論は前者を念頭に置いたものとは思われない。フーコーのまなざし論は彼の考察を進めるためのきっかけに過ぎないがゆえに，部分的にしか適用されていないのであろう。

5－2 「まなざし」論の可能性 ── 儀礼論としての展開 ──

アーリーは，自分の理論を展開するのに先立ち，第 1 章第 2 項「観光研究への理論的アプローチ」で，観光研究の諸理論を整理しており，そこには，彼が考える他の理論との関連性やスタンスが見える。よって，それをまとめることから入ろう。

観光客が土地の人々と交流せずに過ごすという「環境の泡」を容認し，作り物のアトラクションにも喜んでだまされているというブーアスティンの主張には，彼の理論との融和性を認めていると思われる。ブーアスティンはメディア研究の方で有名だが，「たえまなく広告やメディアを通して，別の観光のまなざしのイメージが放出され，これがツーリストに，今度訪れるべき場所の選択と評価の基礎資料を与えてくれるという幻想の永久自己増殖の閉鎖系を構成していくのである」[38] という彼の言葉は，旅行のガイドブックが観光対象やその見方を規定するというメディアの役割を重視する彼の考えに沿うものである。

マッキャーネルの主張に対しては，「ツーリストは，自分の日常生活から離れた別の『時』と別の『場』に本物を求める一種の現代の巡礼なのだ」[39] と捉え，次のよう

36）同書 p12

37）須藤はその著書の中で次のように述べている。
「フーコーの分析概念である『まなざし』は，知の専門家 (例えば医師) が作り出し，社会的に制度化される『ものの見方』であるが，近代以降の観光の『まなざし』は，観光の専門家が作り出すもの (例えば『観光化カリスマ』の言説) ではなく，近代の交通の発達やメディアの在り方，あるいは消費社会の消費の在り方が，作り出すものである。」(須藤 2008: p158 脚注)

38）Urry 1990＝1995: p13

39）同書 p15

に記している。

「ツーリストのまなざしは，土地の生活にあからさまに侵入してくるようになる。しかしこれは一般的に許されないことである。それでもじろじろ見られる。そこで，土地の観光業者はやがて，創意工夫した人工的な手法で舞台裏をつくりだすようになる。『観光スペース』が，このようにして，マッカネルが言う『舞台化された本物』というものの周辺に創出されていくのである。創られた観光の見世物が発達したのは，ツーリストのまなざしの対象にどのように応えていくかということの結果でもあるが，自分自身の生活の舞台裏への侵入からの自己防衛の結果でもあり，またこの儲けにつながる絶好の投資の機会に優位に立とうという結果でもあったのだ」[40]。

これは，舞台裏に本物を探し求めようとする観光客の営みを「まなざし」を用いて読み替えていると言えるだろう。また，観光には，「風景の命名，ストーリー作りと盛り上げ，祭り上げ，聖具の機械的な複製」[41] などといった形で自然物や文化的事物を観光対象として聖なるものに変化させる「聖化過程」があるとする点も評価し，「まなざし」を作る工夫として捉えている。

さらに，観光客がまなざしを引き寄せされる対象の特徴として，次の6つを挙げている[42]。①「無比なもの」(エッフェル塔，エンパイヤーステートビル，バッキンガム広場，グランドキャニオン，ケネディ大統領が暗殺された場所など，誰もが知っているという前提があるがゆえに，一生に一度でもいいから見てみたいという欲求が働き，聖地化される)，②「特殊な記号」(典型的な英国の村，典型的なアメリカの摩天楼，典型的なドイツのビヤガーデン典型的なフランスのシャトーなど，対象を記号のシニファンとして見るという形)，③「見慣れた物の見慣れていない面を見る」という事例 (博物館での展示物)，④「普通でない文脈で展開される普通の社会生活を見る」事例 (かつての中国観光)，⑤「通常でない視覚環境のなかで，見慣れた仕事や行動をする」という事例 (異なる視覚的背景において行われるスポーツ，ショッピング，飲食など)，⑥「特別な記号」を見るという行為 (月の石や有名な画家の絵画など，記号として特別な意味を与えられることによって初めてまなざしが向けられる)。これらは先の「聖化過程」と異なり，神聖性を帯びる理由として彼が整理したものに過ぎないが，社会における「聖なるもの」がどこにどのような形で存在するかを考える際の助けになるであろう。

この理論的論考は非常に示唆に富み，アーリーのまなざし論の骨子とも受け取るこ

---

40) 同書 p16

41) 同書 p17。この聖化過程は人類学者 V. ターナーの「通過儀礼」あるいは「コミュニタス」の概念とも絡めて取り上げているが，ここでは触れないでおこう。

42) 同書 pp21-3

とができるが，残念なことにこうした視点は，その著書の中でその後に展開される考察にはほとんど生かされていない。では，これらを生かす方法はどうあるべきであろうか。アーリーはこの理論的論考において，「まなざし」を作る要因として，「その対象の特徴」「聖化過程」「メディアの役割」を挙げているが，これらの作用によってあらゆる所に存在する「まなざし」の対象となるもの，つまり「聖なるもの」を洗い出すことで，まなざし論は大きな地平を獲得するだろう。様々な「聖なるもの」を位置づけることによって，社会の鳥瞰図が描ける可能性もある。その時のキーワードが，人々によって向けられる「まなざし」である。社会的空間において，人がどのような時にどのようなものに「まなざし」を向けるのか。自然物や人工的な建造物，人，物すべてがその対象となる。テレビやパソコンを含む様々なメディアもそこに含まれる。つまり，メディアも「まなざし」の対象の一つに過ぎないことになる。メディア研究は得てして，メディアの中に盛り込まれる内容を考察することに集中しがちだが，それとは違い，メディアそのものへのまなざしのあり方を考えるのである。例えて言えば，これは，看板に何がどのように描かれるかを検討するのではなく，看板そのものあり方を検討することを意味しよう。人々の日常生活におけるそうした数々のまなざしの対象の位置づけを検討することによって，まなざし論は社会分析の大きな突破口となろう。

須藤はマッキャーネルの業績を，観光の儀礼構造として次のように述べている。

「マッカネルによれば，観光はゴフマンがいうところの現代の〈儀礼〉であり，究極の価値に対して敬意や関心を導き出す『機械的で因習的な行為』(MacCannell 1976: 42) の一つである。ここでは，観光を動機づけるものは一種の〈集合表象〉であり，〈日常〉と〈非日常〉との対立というよりは，むしろ〈聖〉と〈俗〉との対立である。現代人の観光と『未開人』の儀礼行為は等価であり，『オーセンティックではない自己の経験を現代人たちが気にとめること，これは未開社会において聖なるものを気にとめることとパラレル』(ibid: 93) なのである。すなわち，『旅は本来，宗教的な巡礼だった』(ibid: 97) のである。さらに，アーリはマッカネルの〈聖〉と〈俗〉との対立図式を，ヴィクター・ターナーの〈通過儀礼〉概念に結びつける」[43] (下線は筆者)。

人類学者であるターナーの名前が出てきたが，人類学の視点から観光を捉える橋本和也は，次のように述べている。

「ターナーは，現代社会の特徴を反映させた修正概念である『リミノイド』(リミナルもどきの) 領域でなら『コミュニタス』的経験が可能であると考えた。日常から離れ，社会的身分・職業・地位などを前提としない，人と人のつきあいが実

43）遠藤・堀野 2004: pp228-9

現する場所として観光の場を設定することは可能である。・・・霊的な存在も儀礼的・呪術的な実践も介入することなく，仕事現場や家庭などの日常から離れた観光者同士が，リアルな社会関係を持ち込まない一時的な観光の空間で，『本当の自分』をさらすことができると夢想する者同士が出会うのである」[44]。

私の場合，ターナーのような人類学的な解釈をするわけではないが，マッキャーネルが着目するように，儀礼として捉えることによって，まなざし論はデュルケムの儀礼論へとつながっていく。須藤はこのことを意識し，以下のようにも述べている。

「〈聖なるもの〉とは，人々の共同の象徴的な経験をとおして，集合的表象が現実を分節することによって生まれる効果なのであり（『広大な共同の所産』とデュルケムは言う），〈聖〉なる対象が前もって持っている〈本質〉によるものではない。同様に，観光現象もまた，人々に共有されている時間や空間が文化的に分節化されることの『効果』によるものであり，観光客とホスト（観光業者と地域住民）の儀礼的実践によって作り出される混合的な何物かなのである。観光は，象徴を介した文化の聖別化作用を背景としつつ，人々のコミュニケーションの在り方をとおして方向づけられた，極めて社会的な現象なのである」[45]（下線は筆者）。

アーリーのまなざし論において，「非日常的なもの」の特性は「日常的なもの」の特性によってこそ浮かび上がってくる。そのため，非日常空間であるリゾートでの変化ではなく，必然的に，日常空間である都市のあり方の変容も考察の対象に含まれることになる。堀野正人は都市空間の演出の問題を論じる中で，「あるモノが文化遺産にとって必要条件となる本物性に欠けていても，何らかの非日常的な楽しみを誘発する力さえ持っていれば観光対象としては成立しうる」[46]と述べ，また，中川理の言葉を引用して，「観光地とは無縁だったような街にまで，演出的な空間は広がりをみせている」[47]「風景に自らを置いて楽しむ『まなざし』を，ディズニーランドで訓化され，身に着けた人々が，他の商業空間さらには博物館のような社会教育施設にさえ向けるようになり，それに対応した物語的デザインともいうべき手法が，展示的空間に一般化したことになる」[48]とも述べている。実際，アーリー自身も第7章「観光，文化，社会的不均衡」4節「テーマとモール街」の中で，ショッピングモールに触れ，そのテーマ的性格の普及について次のように述べている。「原型よりリアルに見える新しいテーマを想像するこの技術的能力は，観光の目玉として“自己目的”化して急速に広がってきたものである。その始まりがディズニーランドであり，それがショッピン

44）橋本 2011: p253
45）須藤 2008: pp4-5
46）遠藤・堀野 2010: p63
47）同書 p73
48）同書 p73

グセンターやモール街へと進んだ」[49]（下線は筆者）。そして，カナダのアルバータ州エドモントンにあるウェスト・エドモントン・モール（West Edmonton Mall）を取り上げ，「1987 年には 900 万人の客を集め，北アメリカで，ウォルトディズニーワールド，ディズニーランドに次ぐ第三位の人気観光地となった」[50] と記しているが，今でもそこは絶大な人気を誇っており，そのホームページを見ても分かるように，単なるショッピングモールではなく，屋内遊園地である Galaxyland や屋内ウォーターパークの World Waterpark をはじめ，数々のアトラクションとホテルを兼ね備えた，一大レジャーランドと化している。「テーマ」はまなざしの対象となるためには必要なのである。

社会におけるこうした「テーマ」の重要性は，『ディズニー化する社会』を書いたブライマン（A. Bryman）の主張にも通じる考えであり，都市空間におけるテーマ化や，それに伴うランドマークの重要性をクローズアップさせるだろう。このことを念頭に，いま一度，ブラックプールをはじめとするイングランド北部のリゾート地のランドマーク的存在を探してみよう。

通りから見えるブラックプール・タワー

観覧車を有する Central Pier

モアカムにある時計台と突堤（The Stone Jetty）

49）Urry 1990＝1995: p261
50）同書 p262

サウスポート桟橋へと続く The Marine Way Bridge

サウスポート桟橋（Southport Pier）

セント・アンズのメインストリート
St. Anne's RD に立つ時計台

セント・アンズ桟橋（St. Anne's Pier）

リザムの中心街と海辺への遊歩道

これらの比較で分かるように，それぞれの町でまなざしをひきつける対象には，その程度に違いが見られる。当時の隆盛を極めた頃とインパクトの度合いは違っても，ブラックプールのタワーと桟橋はやはり別格であろう。町の規模がそもそも違うという指摘もできるが，比較的大きな町であるサウスポートには，町のどこからでも目を引くブラックプール・タワーのような存在はなく，１本ある桟橋も，魅力的に映らない。先に紹介したが，展望塔や桟橋の存在の意味を，アーリーは「こういう展望塔と，やや規模は小さいが桟橋は，物をその構造物から見ることを可能にし，人間の肉体を

非日常的な自然現象へと結びつけることを可能にし，自然を凌駕する人間の力と一体化し，人間の力を祝福することを可能にしてくれる」として，そこからの非日常的な眺めに見出しているようだが，実はそうではなく，そうした対象を眺めるという形でまなざしが形成されていることに気づくべきである。タワーで日本人が真っ先に思い浮かぶのは，東京タワーやスカイツリーであろうが，外国人観光客に最も人気の観光地京都にある京都タワーもそれに含まれるだろう。建設には様々な異論があった京都タワーも「京都らしさ」を感じさせる眺めに変わりつつあると井口貢は論じている[51)]。

ただし，こうしたまなざしの対象は，もちろん何でもいいということではない。まなざしの対象になるためには，無理やり目に飛び込んでくるのではなく，文字通り「人目を引く」だけの魅力がなければならない。思わずカメラのシャッターを押したくなるような「絵になる」対象と表現した方が分かりやすいだろうか。そうしたまなざしの対象があるということで，人々の視線は集まるわけだが，その「人々の視線が集まっている」，すなわち「まなざしの対象になっている」ことを認識することにこそ，大きな意味がある。自分もそれにまなざしとして加わり，人々と感情を共有すること，そうした行為に参加できること，これが人類学的な意味でのコミュニタス的体験と言えるだろう。これを求めて人はある一定の場所に集うのであって，このことを可能にする対象を求めて，人は旅に出たり，遊園地やショッピングモールに行ったりすると言えるのではないだろうか。

このように考えると，まなざしの対象というのは，何もタワーのような建造物である必要はない。息をのむような景色でもいいのだ。先ほど「絵になる」対象と表現したが，家並みなどの景観を含め，ほかの人の視線も集めそうな景色がそこにあればいい。イングランド北部の海辺リゾートの様子を，今度はビーチに着目して比較してみよう。

ブラックプール

51）井口・池上 2012: p332

モアカム

サウスポート

セント・アンズ

ビーチそのものが遊泳に適しているかどうかといった違いもあろうが，ブラックプール以外は単なる砂場，ひどい所は干潟の状態で，とてもビーチとは呼べなかった。そうした場合，海岸は遊泳の対象ではなく，ビーチというまなざしで眺められることはない。ブラックプールの写真に見られるように，水遊びをする人々の姿ももちろんその光景の一部で，重要な要素を成す。「まなざしの一部になる」というのは，他の人々と同様に同じ対象を眺めるという意味ではなく，眺めている光景の一部になっている人々ともまなざしを共有するという意味で，こうした感覚が重要であろう。観光地と

しての京都を井口と池上は様々な角度から取り上げているが[52]，寺社仏閣をはじめ町屋，伝統産業，音楽，食文化など，ありとあらゆるものがまなざしの対象となる可能性がある。もちろんこれは京都に限ったことではないが，まなざしの対象となりうるものを如何に見つけ出したり作ったりできるか，あるいは，まなざしという行為自体を如何に促していけるか，これが観光都市としての成功のカギではないだろうか。

最後に，人々が聖なるものを求めるという考えに対する反論として，『マクドナルド化する社会』の著者で知られるG.リッツァ (Ritzer) を少し取り上げたい。彼はM.ウェーバーの合理化していく社会という考えをもとに，聖なるものがこの世から駆逐されていくと主張した。果たしてそう言えるのだろうか。合理化によって社会から魔術性が失われていくという側面は確かにあるかもしれないが，「聖なるもの」あるいは「非日常性」が無くなるという時に，何を持って「聖なるもの」「非日常性」と呼ぶのかが問題となってこよう。俗にまやかしと呼ばれるようなものは，科学の普及とともになくなっていくだろうが，デュルケム自身が見据えていたように，近代社会においても，人々を結びつけるための集合表象は「聖なるもの」として求められ続けるのであり，こうした考えは，E.ゴフマンなどデュルケムの思想を受け継ぐ者にも同様に見られることである。リッツァの考えに対する反論として須藤が述べている箇所を最後に引用しておこう。

「しかし，このような慣行における合理化論は，観光の変動の一方の側面しか見ていない。先にもふれたマッカネルの観光の『儀礼性』の研究は，システム化した現代の観光の中にも『儀礼性』をもった旅への希求が存在していることに焦点を当てていた。マッカネルやアーリが見ていたように，『非日常性』を求める観光という基本的性格は依然として変わらないというのが筆者の立場であり，それには次のようなことが根拠として挙げられる。①社会の機能的合理化が進むからこそ，『意味』やアイデンティティが希求されること，②非日常性の日常化のために『もう一つの現実』としての観光が日常から分節化することが難しくなるがゆえに，あらゆる観光 (地) が次第に人工的なものになり，そこにおいては『本物』と『偽物』の区別は意味をなさなくなること，③現代人の生活は絶え間ない自己モニタリングとアイデンティティの再構成を人々に要求し，その結果，人びとは固定的な役割関係から解放され，個人の行動や人間関係に変えず再帰性が働くようになること等である。以上のような現代社会における文化のあり方を考慮に入れると，ブーアスティン，リッツァの見方は決定論的でエリート主義的であると言わざるをえない。そもそも近代化は荒涼とした機能的合理性だけで成立しているわけではなく非合理的な領域がそれを支えているということを，とくにリッ

52）同書

ツァは見逃しているのである」[53] (下線は筆者)。

6　メディアの影響

前項ではまなざしの対象について論じ，メディアもその対象の一つとして考えるとした。この場合のメディアは，テレビ，新聞，雑誌などといったマスメディアだけでなく，看板，広告，写真などあらゆるメディアを含んでおり，人々のまなざしが互いにどこに向かうかといった，まなざしの交差点を見つけることが肝要と考える。まなざしの対象を共有することの意味とともに，メディアが与えた影響を，アーリーは次のように述べている。

「それぞれの社会階級 (やその他の社会勢力) の集合的アイデンティティは〈グリッド〉(規定的な分類体系) と〈グループ〉(外と内を区別する境界) を通して形成される。このような集合的アイデンティティは，当該の社会集団に特有な，独自の情報の体系に依拠している。しかしながら，メディアの成長は，情報のこういう個別的とか特有とかいう体系の意味をほとんどなくしてしまったのだ。それは，どのような社会集団出身者も，個人としては，もっと広く手に入る情報体系に晒されているからである。また，各集団は，今や他の社会集団の内側の表象のいくつもの面を見られるからでもある。メディアは，他の人々の生活の表象を，ますますおびただ(おびただ)しい量で，放出してきている。エリート集団や，英国では王室のそれでさえ (とりわけ？) 放出される。その代わりに，この種の制度化された覗きは，そのよその集団の様式を採用することを可能にし，おそらく，ハイカルチャーでも，ローカルチャーでも，趣味の良いのでも悪いのでも，とにかくどこかの価値を身にまといながら，他の社会集団間との境界を逸脱することが可能になっている。メディアは，また，これは楽屋なのだと考えられているものとか，プライベートであるべきものとか，公にしていいものとかをぐずぐずにしてしまった」[54] (下線は筆者)。

このアーリーの主張は，見ているもの，感じているものが同じであるということが，社会集団や個々人の集団的アイデンティティを形成する上でいかに大切であるかを教えているが，同時に，メディアが社会集団や社会階層といった集団の境界を突き崩し，それだけでなく，表と裏という公私の境も揺るがしているということを教えている[55]。

---

53) 須藤・遠藤 2005: pp65-6

54) Urry 1990＝1995: p163

55) この「ぐずぐずにしてしまった」という言葉の原語は「undermine」で「土台を壊す」「弱体化させる」といった意味がある。したがって，もう少し分かりやすくすると，「何がプライベートとして保たれるべきで，何が公にされうるかといった，本来舞台裏として考えられるべきものの土

またアーリーは，メディアがもたらした「まなざし」の変化についても触れている。彼はポストモダンの様相の一つとして遊戯性を取り上げ，ファイファーが挙げたポスト・ツーリストの様相の一つを以下のように紹介している。

「ポスト・ツーリストは，たくさんの観光のまなざしの典型的な対象を“見る”ために家から離れる必要はない。テレビやビデオがあれば，どんな種類の場所にもまなざしを向け，比べ，結び合わせ，もういちどまなざしを向けることができるのだ。自分で『本当に』そこにいると想像することが可能で，本当に夕日や，山並みやトルコブルーの海を見るのだ。典型的な観光の体験というのは，いずれにしても，“名づけられた”景観をある“枠”を通してみることで，枠というのは，ホテルの窓とか自動車のフロントグラスとかバスの窓だ。しかし，これは今や，お茶の間で，スイッチ一つで体験できるのだ。しかも何度でも繰り返すこともできる。もうほとんど，本物という意味も，一生に一度のまなざしという感覚もないどころか，あるのはスイッチ一つで枠を通して無際限のまなざしを手に入れるということばかりだ。『観光のまなざし』の卓越性は，こういうまなざしが疑いもなくポストモダンの大衆文化の一部になるにつれて，失われてしまった」[56]（下線は筆者）。

さらに，メディアの普及によって，人々の非日常性を求める欲求がどんどん高くなったということを次のように主張する。

「先進西側社会では視覚優位のメディアがどこでも入手できることがあって，それが〈日常〉的なものと，あわせて〈非日常〉と人が見るものの水準線を上へ大幅に押し上げる結果を招いた。さらに，メディアが，〈三分間文化〉を生み出したということが事実だという意味範囲で，人々の娯楽の形と場の転換をすすめたということもまたあり得ることだろう。まず確かなことは，人々が，というかとくにその家族が，今までしてきたことを続けていても，今までほど満足を感じなくなっているのではないかということだ。それで，休暇は集合記憶や集合体験の深化との関係が薄くなり，刹那の娯楽との関係を強めてきているのだ。その結果，人々は，ありふれた体験からはずれた新しいものを求め続けているのである。・・・それで，とくに，かつて海浜リゾートで見られたような『単純な』娯楽を楽しむのがますます難しくなっているのだ」[57]（下線は筆者）。

「三分間文化（three-minute’ culture）」は，飽きやすいことを意味する言葉として使われているようだが，これらの主張はどうだろうか？メディアの中でも，ここではテ

台を揺るがしてしまった」ということだろう。

56）同書 pp179-80

57）同書 pp182-3

レビの影響を念頭に語っていると思われるが，テレビひとつ取っても，社会集団や社会階層を突き崩すだけの影響があるようには私には思えない。アーリーがこのことを記した時代から技術はどんどん進み，デジタル放送化を受けて，今や多チャンネル時代となったが，テレビというひとくくりで，それが皆に一様な情報を与えると考える必要はないだろう。なぜなら，どんなチャンネルを見るかという選択権が視聴者には与えられているからである。さらには，テレビ番組自体を見る・見ないといった選択権もある。公私の境の問題はどうであろうか。カメラは小型化し，性能もアップして，監視カメラや盗撮用カメラ，暗視カメラなどにより様々なものが捉えられるようになった。確かに，今までカメラはおろか，通常は舞台裏として関係者以外立ち入り禁止だったところにカメラが入ることによって，白日の下にさらされたものは数多くあるだろう。しかし，それが映像として大衆に公表されたということ自体が，実際の社会空間としてのプライベートな空間を無くしてしまったとは考えにくい。テレビにおける映像は一過性のものであろうし，またそれは撮影用に撮られた舞台裏でもあるからだ。これはすなわち，マッキャーネルの言うところの「演出された真正性」という問題である。撮影現場を想像してみると分かる通り，テレビ用となると，必ずと言っていいほど演出の要素が加わる。また，メディアは現実をそのまま映すとは考えにくく，カメラのフレームひとつ取っても，メディアによって切り取られるわけで，メディアに写し取られた瞬間から別物になると言えるだろう。少なくとも，実際に自分の目や耳で見たり聞いたりするものとはだいぶ違うものになる。今や，インターネットでGoogle Mapのストリートビューを使えば，世界の様々な所の景色を自在に楽しむことができる。しかしその現在においても，旅行自体はなくならず，ますます盛んになっている。遠いがゆえに様子も何も分からなかった昔とは違い，書物，写真，ビデオ，インターネットとメディアが進化していくに従って多くの情報を人々は得るようになったが，どんなにメディアが発達しようとも，メディアは所詮「仲介物」なのであって，現実とは異なるということを人は知って行動している。それだけに，メディアの役割を過大視してはいけないだろう。

しかしながら，メディアがまなざしに及ぼす影響を考えないわけにはいかない。テレビなど，メディアも人々がまなざしを向ける対象の一つではあるが，アーリーも主張するように，それは非日常的なものは何かといったことを人々に訴える重要な窓でもあり，その存在自体が，人々がまなざしを向けるものとしての前提の上に成り立っているからである。メディアの中でも，今やテレビを凌ぐ影響を持つまでになったインターネットなどの電子メディア，これらは近年小型化し，スマートフォンとして持ち歩く物となった。この影響は看過できない。なぜなら，テレビともビデオとも異なり，常に外部と容易にアクセスできるからである。どこにでも持ち込まれるその電子メディアは，プライベートな空間をいつでも大衆に公表できるツールとなった。この

ことに関してはメイロウィッツの研究があるが，須藤は，ポストモダンにおけるメディアの扱いに関し，メイロウィッツの研究を取り上げ，以下のように紹介している。

「情報社会の〈内破〉的 (境界破壊的) コミュニケーション・ツールの普及が個人崇拝の (あるいは伝統崇拝の) 人と場所との関係を崩壊させてしまうメカニズムを描いている (Meyrowitz 1985＝2003:32)。電子メディアは私的局域と公的局域を融合させ，『様ざまな役割に対して裏領域を作り上げてきたものが露呈することで，役割の移行を取り巻く神秘性の多くが取り除かれる』 (ibid: 304)。〈裏局域〉の不可侵性を守っていた提示や回避の儀礼性は効力を失い，〈裏局域〉が持っていた聖性や非日常性は〈表局域〉に蔓延し，消耗を繰り返す」[58] (下線は筆者)。

このメイロウィッツの主張は大いに検討すべきであろう。身体性を失ったコミュニケーションの中で，「まなざし」という行為がどのような形を取っていくかは，これからの研究課題の一つとなるが，ここで一つ言えることは，「まなざし」の対象として，「意識」がますますクローズアップされるだろうということである。「まなざし」という言葉から，その対象は視覚で捉えられるものと考えがちだが，そうではない。相手が盲目であっても，意識を向けている対象は感じ取れるのであって，この「意識を向ける」という行為を分かりやすくするために便宜的に使った言葉と解釈すべきであろう。したがって，電子メディアを扱うことによって，まなざし論は，意識社会学とも呼ぶべき領域に入っていくことになる。

7　これからの課題

電子メディアの影響を考えることに加えて，まなざし論が抱える課題をもう一つ述べておきたい。それは，「感情」という要素である。まなざしを考える意義をアーリーは私たち教えてくれたが，まなざしをただ向けるだけでは十分ではない。人々が何にどのようにまなざしを向け，それがどのような形で「注意の焦点」として人々に認識され，お互いの感情的な高揚をどのようにもたらすか，といった一連の行為に結びついて考えられる必要があるだろう。「絵になる」対象という表現を何度か用いたが，そこには感情が含まれている。観光で言えば，うきうきするような高揚感であろう。これを促すような景色を町が持っていること，あるいは作っていくことが重要である。今回訪れた町で私が見つけた絵になる景色をいくつか紹介しよう。

58）遠藤・堀野 2010: p10

ブラックプールの「ビーチで水面がきらきら輝く様子」と「タワーとカモメと人々」

サウスポートのマリーン・レイク（Marine Lake）の様子

リザムの「ストリートに立ち並ぶカフェの様子」と「建物の間から垣間見える海辺」

これらは，その土地の住人たちにとっては見慣れたもので，何も特別な光景ではないかもしれない。しかし旅行者には新鮮に映り，心がわくわくするような景色も存在するのである。まなざしという行為をとらえる時に，これに感情の要素をどう取り組むか，これがまなざし論の進展には欠かせないだろう[59]。

---

59) デュルケムの考えに従えば，聖なるものを作り上げるには感情の高揚が欠かせない。社会学には感情社会学という分野があり，社会における感情の形成やそのあり方を研究するものだが，それとの連携も必要となってこよう。拙稿であるが，以前，『感情社会学の可能性』と題し，感情の要素（他者の感情をどう読み取るか）について論述した。（土井 2003）

参　考　文　献　（アルファベット順）

Baudrillard, J., 1981, *SIMULACRES ET SIMULATION*, Editions Galilee.（＝1984，竹原あき子訳，『シミュラークルとシミュレーション』，法政大学出版局）

Boorstin, D., 1962, *THE IMAGE: or What Happened to the American Dream*, Atheneum.（＝1964，後藤和彦・星野和美訳，『幻影の時代　マスコミが製造する事実』，東京創元社）

Bryman, A., 2004, The Disneyization of Society, Sage（＝2008，能登路雅子監訳，『ディズニー化する社会　文化・消費・労働とグローバリゼーション』，明石書店）

Dennis & Jan Kelsall, 2003, *Lancashire: Living Memories*, Frith Book Company Ltd.

Dennis & Jan Kelsall, 2003, *Lancashire-A Second Selection: Photographic* Memories, Frith Book Company Ltd.

土井文博，2003，「感情社会学の可能性」，『総合科学』 第 10 巻第 1 号 pp23-47，熊本学園大学総合科学研究会

土井文博，2012，「社会のディズニー化と大学教育とホスピタリティ」，『産業経営研究』 第 31 号 pp27-45，熊本学園大学付属産業経営研究所

遠藤英樹・堀野正人編著，2010，『観光社会学のアクチュアリティ』，晃洋書房

遠藤英樹・堀野正人編著，2004，『「観光のまなざし」の転回』，春風社

橋本和也，2011，『観光経験の人類学 ── みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』，世界思想社

井口貢・池上惇編著，2012，『京都・観光文化への招待』，ミネルヴァ書房

MacCannell, D., 1999, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, University of California Press.（＝2012，安村克己ほか訳，『ザ・ツーリスト』，学文社

Meyrowitz, J., 1985, *No Sense of Place: The Impart of Electronic Media on Social Behavior*, Oxford University Press.（＝2003，安川一・高山啓子・上谷香陽訳，『場所感の喪失・上　電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』，新曜社）

須藤廣・遠藤英樹共著，2005，『観光社会学 ── ツーリズム研究の冒険的試み』，明石書店

須藤廣，2008，『観光化する社会 ── 観光社会学の理論と応用』，ナカニシヤ出版

Urry, J., 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage Publication.（＝1995，加太宏邦訳，『観光のまなざし ── 現代社会におけるレジャーと旅行』，法政大学出版局）

安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著，2011，『よくわかる観光社会学』，ミネルヴァ書房

参　考　Ｈ　Ｐ

Alton Towers Theme Park（http://www.altontowers.com/）

Alton Towers Heritage（http://www.altontowersheritage.com/）

Blackpool Pleasure Beach（http://www.blackpoolpleasurebeach.com/home）

CenterParcs（http://www.centerparcs.com/）

Sherwood Forest Center Parcs（http://www.centerparcs.co.uk/villages/sherwood/index.jsp）

The Blackpool Tower（http://www.theblackpooltower.com/）

West Edmonton Mall（http://www.wem.ca/）

Attractions at WEM（http://www.wem.ca/play/attractions-at-wem）

The possibility of Sociology of Tourism : Beyond J. Urry's theory of "Gaze"

Fumihiro DOI

The phenomenon of Tourism happened in the middle of the 19th century and it has a big effect in our society now. Studying the characteristics of tourism itself is one of the aims in this field. But, through that study, there is a possibility to think about the essence of society and the characteristics of human beings because we can see the important characteristics to create society in the people's behaviors of tour. Gaze is one of them. We create sacred objects in our society by gaze. Urry studied how people's gaze worked to make the seaside resort boom in northern England from the second half of the 19th century to the first half of the 20th century. But, he discussed about the change of social situations to explain people's gaze instead of explaining the behavior of gaze itself. Therefore, in this paper, I try to find a way for the social study of people's behavior and society by the view point of "Gaze" beyond his study. First, I introduced the history of tourism and the main trend of Sociology of Tourism. And, I discussed Urry's "Gaze" theory and pointed the characteristics and the limit. After that, I proposed a possibility to develop his theory to see people's behavior of everyday life with ritual theory. At the end, I discussed the effect of electronic media in this information society and the element of Emotion of human being to put this study forward.